

27年度版教科書つれづれ 8 「ゆうすげ村の小さな旅館」(東書・小学3年)の巻

加藤 郁夫(読み研事務局長)

「ゆうすげ村の小さな旅館」は、東京書籍小学3年(上)に収録されている物語である。茂市久美子の『ゆうすげ村の小さな旅館』という5月～翌年4月までの毎月の出来事をつづった12篇の連作シリーズの第一作にあたるもので、この短編のもともとの題名は「ウサギのダイコン」という。

この物語も、23年度版教科書から引き続いて収録されているのだが、細部においてはかなりの変更がほどこされている。

前述したように教科書のための書下ろしではない。元々の作品をここでは原典と呼ぶことにする。原典は次のように始まっている。

ゆうすげ村に、ゆうすげ旅館という一軒の小さな旅館があります。
小さな旅館で、年とったおかみさんが、ひとりで、旅館を切りもりしています。
おかみさんの名前は、原田つぼみさんといいます。

この3文で場や人物を語り、『ゆうすげ村の小さな旅館』の背景を説明している。そしてそこから一行空けて、「五月、若葉の季節でした。」と物語がはじまる。

23年度版(以下旧版)は、次のように始まっている。

わか葉のきせつでした。ゆうすげ村のゆうすげ旅館では、山に林道を通す工事の人たちがとまりに来て、ひさしぶりに、六人ものたいざいのお客さんがありました。ひとりで旅館を切りもりしているつぼみさんは、朝早くから夜おそくまで大いそがしで、いきをつくひまもありませんでした。
(傍線・加藤)

「わか葉のきせつでした」からはじまり、下線を引いた箇所にもられるように、背景の説明を途中に入れ込んでいるのである。

27年度版(以下新版)は、はじめが次のようになっている。

ゆうすげ村に、ゆうすげ旅館という一軒の小さな旅館があります。つぼみさんという年とったおかみさんが、一人で旅館を切りもりしています。
わか葉のきせつでした。ゆうすげ旅館では、山に林道を通す工事の人たちがとまりに来て、ひさしぶりに、六人ものたいざいのお客さんがありました。つぼみさんは、朝早くから夜おそくまで大いそがしで、いきをつくひまもありませんでした。

原典で3文あった背景の説明を2文に縮めながらも入れて、行空きなして「わか葉のきせつ～」に入っている。

原典は、小学3年生の物語教材としては少し分量がありすぎて、それで少し短くする必要があったのだらうと思われる。旧版は、これ以降のところでも、カットされている箇所が随所に見られる。新版はそれに対して、全体としてより原典の表現に近くしているといえる。その意味では、27年度版の方がよくなったといえる。

ただ、旧版・新版ともに気になる箇所が二箇所ある。

「ゆうすげ村の小さな旅館」は、6人のお客さんが来て、仕事が大変になったつぼみさんのところにウサギ(美月という名前)が人間に化けて手伝いに来るという話である。美月がウサギではな

いかと思わせる仕掛けが随所にほどこされている。そして、つぼみさんが美月の正体を知るところがクライマックスになっている。それだけに、そのような仕掛けをきちんと読み取ることが大事になる。気になる箇所といったのも、実はそこに関連している。

一つ目は、美月が登場する場面である。つぼみさんは、「せめて、今とまっているお客さんたちが帰るまで、だれか、手つだってくれる人がいないかしら。」と道端でひとり言を言い、それを美月が聞きつけて、美月の登場になるのだが美月のセリフは旧版も新版も次のようになっている。

「ほら、きのうの午後、だれか手つだってくれる人がいないかしらって、言ってたでしょ。」

ところが、原典は次のようになっているのである。

「ほら、きのうの午後、だれか手つだってくれる人がいないかしらって、言ってたでしょ。わたし耳がいいから、きいてしまったんです。」
(傍線・加藤)

下線部の「わたし耳がいいから、きいてしまったんです。」が原典にはある。この一文があることで、道端でのひとり言を聞くことができる耳をもつ美月のふつうでないところに着目できる。美月ってちょっとおかしいぞと、読者は思うのである。

二つ目は、美月は山の畑で採れたウサギダイコンを持ってくるのだが、ウサギダイコンと聞いて、つぼみさんは次のように言う。

旧版では、

「～それにしても、みごとなダイコンだこと。ネズミダイコンなら聞いたことがあるけど、ウサギダイコンっていうのもあるのね……。」

新版は、

「～それにしても、みごとなダイコンだこと。ネズミダイコンなら聞いたことがあるけど、ウサギダイコンっていうのもあるのね。」

この箇所は原典では次のようになっている。

「～それにしても、みごとなダイコンだこと。ネズミダイコンなら、きいたことがあるけど、ウサギダイコンっていうのもあるの……。」

ネズミダイコンは、その名のとおりねずみ型をしており辛味大根などとして用いられるもので、実際に存在しているのだが、ウサギダイコンという大根は現実には存在しない。そのような知識を持っていると、「ウサギダイコン」という言葉を聞いて、「あれ？」と思うのだが、小学3年生ではそのようなことは望むべくもないだろう。私も恥ずかしながらネズミダイコンという名前を知らなかった。

原典が「ウサギダイコンっていうのもあるの……。」と言葉の途中で終わって、リーダイが付けられることで、つぼみさんのウサギダイコンへの疑いがさり気なく表現されている。「ウサギダイコンっていうのもあるのかしら」とも読めるような、奥行きのある表現になっている。

それに対して、新版は「ウサギダイコンっていうのもあるのね。」と納得の表現になってしまっており、ウサギダイコンに対して読み手が「あれ？」と思うことは無くなってしまう。

旧版は、原典と新版の中間ともいえる表現である。この点に関しては、新版よりも旧版の表現のほうがマシである。

小学3年生だから、そんな細かいところまで読めなくてよいと思われるかもしれない。しかし、私は国語の授業では言葉に対するアンテナを研ぎ澄ますことが大事だと考える。「ウサギダイコン

っていうのもあるの……。」という中途半端な表現のおかしさに気がつくことができるような子どもたちであってほしいと思うのである。

ただ、この箇所については検定の中で「修正」させられた可能性もあるかもしれない。「ウサギダイコンっていうのもあるの……。」という途中で終わった文だけに、意味がわかりにくいという事で「修正」がかかったのかもしれない。あるいは会社が自主的に「修正」したのかもしれないのだが。

この物語では、美月が普通の人間ではない、ひょっとしたらウサギではないか……と読者に思わせ、その謎が深まって行って、最後に美月の正体がわかるところに、おもしろさがある。それだけに、美月への「疑い」が深まる箇所が二箇所もカット・修正されていることは、残念と言わざるをえない。この二箇所のカット・修正がお話を読むおもしろさを大きく減じている。

国語の授業では、一つひとつの言葉を大事にし、その意味や効果を考えていくことを大事にしたい。それだけに、表現に着目して読みを深められるような箇所にもっと注意を払って欲しかった。

もう一つ、学習の手引にも触れておきたい。旧版の「てびき」は次のようになっていた。

●場面のうつりかわりに気をつけて読み、あらすじをまとめましょう。

それに対して、新版は次のようになっている。

◆起きた出来事をたしかめ、人物についてそうぞうしながら読む。

◆物語のしかけにつながる言葉に気をつけて読む。

新版の「物語のしかけ」はさらに詳しく、次のように書かれている。

●物語のしかけについて考えよう。

▼この物語をさい後まで読むと、実は、美月はウサギであることが分かります。それまでの場面の文章の中にも、美月がウサギであることが分かるヒントがあります。さがしてみましよう。

旧版にもほぼ同じようなことが述べられている。

○この物語をさい後まで読むと、じつは、美月は人間ではなくて、ウサギであったことが分かります。物語のどちゅうにも、美月がウサギであることが分かるようなヒントがあります。どんなヒントがあったか、さがしてみましよう。

同じことを言っているのだが、旧版は「あらすじをまとめ」ることに中心があり、「物語のしかけ」という言葉も用いられていない。新版は、「てびき」自体が「物語のしかけ」を前面に掲げている（「物語のしかけ」やそれに類した表現が「ゆうすげ村の小さな旅館」に関連するページだけで8回も使われている）。

旧版があらすじをまとめることに重点を置いていたのに対し、新版は物語のしかけを読み取ることに重点を置いている。この変更はよいと思う。「あらすじ」はどのくらいの分量でまとめるかによっても、子どもによってまとめかたも違ってくる。それだけに、子どもたちにとってどうまとめるのがよいのかがわかりにくい作業といえる。それに対して、「物語のしかけ」は「美月がウサギであることが分かるヒント」を探すことであり、答えがある程度明確である。なおかつ、この物語の特質をおさえた課題でもあり、これからの物語の読みにも生かすことができるのである。